北海道医報
ISSN 0913-0217　2014.2.1. 第1145号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

季節風

多様なアジアの国々を旅して

―コミュニケーション能力を鍛える―

情報広報部長　山科　賢児

現在の日本外交は、近隣諸国との間に領土問題という重大な案件を抱えている。ここ数十年間戦争のない「平和」と経済のグローバル化の下、中国や韓国の国力増大と日本の国力の相対的衰退は、長い歴史の中で双方に巣食っている複雑な感情を吐露する機運を作り出した。さらに唐突な中国の防空識別圏の設定や韓国の慰安婦問題の再燃に見られる対日政策と、日本政府の集団的自衛権の行使の容認発言や靖国神社参拝などの遠交近攻策が、お互いのコミュニケーションを不毛にしている。

この3、4年の間に中国、ベトナム、マレーシア、台湾、タイといった東アジアや東南アジアの国々を旅してきた。台湾のように日本より日本らしさを感じる国、多くの人種や宗教が混在し活気あふれるマレーシア、圧倒的パワーを感じさせる中国などすべての国々が多種多様である。それぞれの国を訪れるたびに、人々の習慣や生活ぶりなど日本と異なる価値観の存在や多様な文化に触れ新鮮な驚きを感じる。今まで日本が目指してきた欧米の価値観とは違うアジア圏からの視点は、日本が忘れていたことを取り戻すいい機会になっている。そして世界は多極化しつつあり、日本がもはや絶対的経済力を失った現実と、同時に経済的豊かさがすべてではないことを教えられる。

日本はバブル崩壊後たった20年の間でかつてのダイナミズムを失った。今後も相対的経済の衰退と人口構成の老齢化による国力の低下は避けられない。バブル崩壊の教訓を忘れ従来の成長戦略を目指すのは本当に得策なのであろうか。日本は地理的に端に位置し人の出入りが少ない比較的均質な集団であり、よくも悪くも考え方の多様性が乏しくなりがちである。特に今の日本は物事に対する判断が近視眼的で頑なとなり、自らを変えられなくなってしまっている。

高度経済成長期に日本は車や電化製品などを輸出し、アジアでの経済大国の地位を確立してきた。さらに今の日本がすべきことは人材や精神的文化の輸入であり輸出であろう。異なる国との交流は、若い世代に世界の多様性の存在を気付かせ、日本の辺境性と閉鎖性を自覚させることになる。アジアの国々でのコミュニケーションのツールは主に英語であるが、街にはさまざまな言葉が飛び交っている。バンコクのホテルのテレビチャンネルは中東、インド、ヨーロッパ、韓国、中国など数多くの言語で放送されていた。

タイを旅行中の機内で英字新聞の見出しが目に飛び込んできた。靖国神社をYasukuni War Shrineと表記していたのである。確かにYasukuni Shrineという表記のマスメディアもあり、どちらも使われているのが現状らしい。War Shrineを偏見表記として無視や一蹴してしまうのもいいが、これが日本の外から見た靖国神社に対する一つの捉え方であるという現実は意識しなければならない。

コミュニケーションとは、大声で一方的に自分を主張し相手を黙らせたり言い負かせたりすることではない。しかし今の日本はそのような風潮が強くそれに長けた人が評価を受け、とかくその主張が正しいと認められがちである。そのような社会ではコミュニケーションは成り立たない。また一方相手の顔色をうかがい、嫌われないように傷つかないように自分の言いたいことを回避する人々も多くなっている。それではコミュニケーションが希薄になってしまう。「相手を信頼せず苛立たせる」、「自信がなく不安で自分の世界に閉じこもる」、一見両極端に見えるタイプは相手の立場になって考えていないというスタンスでは本質的に同じかもしれない。

ではお互いが理解できずにいる状況を打開するには何をすればよいのだろう。お互いが勇気と尊敬の念をもって相手の懐に飛び込み、自分の立場から一歩踏み出し、自らの言葉を間近で語ることではないだろうか。それが伝わるなら失われたコミュニケーションは復活する。特に身近な相手との間ではコミュニケーションの密度が濃いだけに、一旦不調に陥ると修復は難しい。

実は理想のコミュニケーションの形が我々の身近にある。身を乗り出して患者の言葉に耳を傾けて訴えを聞く、医師が診察時に行なっていること、これがまさにコミュニケーションの原点である。